

第34期第4回研究会「戦後初期日本におけるマス・コミュニケーション研究の再建とアジア」(メディア史研究部会企画)のご案内

日 時：2014年5月16日(金) 18:30~20:30

場 所：立教大学池袋キャンパス 12号館地下1階第3・4会議室

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

電話：03-3985-4806 (社会学部井川研究室) <http://www.rikkyo.ac.jp>

※JR 各線・東武東上線・西武池袋線・東京メトロ丸ノ内線/有楽町線/副都心線  
「池袋駅」下車。西口より徒歩約7分。

(池袋駅方面からお越しの際には、正門をすぎてタッカー門からお入り下さい。)

問題提起者：林 鴻亦 (台湾・天主教輔仁大学)

討 論 者：井川充雄 (立教大学)

司 会：村上聖一 (日本放送協会)

第二次世界大戦における敗戦を契機に、日本の新聞研究は大きな転機を迎えた。すなわち、それまでのドイツの宣伝学の移入の歴史から、アメリカの社会心理学に基礎を置くマス・コミュニケーション研究の導入へと大きく舵を取ったのである。こうした日本のマス・コミュニケーション研究についての学史的な研究は、これまでも何人かの研究者によって論じられてきたが、そのパースペクティブは、日本国内か、日本と欧米の学界との関係にとどまってきた。しかしながら、日本における戦後初期のマス・コミュニケーション研究の再建は、アジアのマス・コミュニケーションへの視点をも大きく変えるものであった。そこで、そうした視座から日本とアジアにおけるマス・コミュニケーション研究の歴史的な解明に取り組んでいる台湾・天主教輔仁大学の林鴻亦氏を問題提起者に招き、研究会を開催することとした。

本研究会では、まず問題提起者から、戦後初期の学界において、ドイツ新聞学・宣伝学からアメリカのマス・コミュニケーション研究へ移行するなかで、どのようにアジア研究の理論的な枠組みを形成させたのかについて、発表して頂く。その際1. 戦前から戦後にかけての新聞学、宣伝学の重鎮である小野秀雄、小山栄三、2. 戦後アメリカの社会心理学を積極的に応用した戦後マス・コミュニケーション研究者である清水幾太郎、日高六郎、そして3. その当時の新聞組織をリードした日本新聞協会、の3つのアクターの営みが、その時代の政治状況のなかで、どのようにマス・コミュニケーション研究の再建に関わり、アジアのメディア環境を観測する理論的な枠組みを構築していったのかを考察する。ここでいうアジアは概ね二つの対象を指す。一つは戦後処理が難しい北東アジアの中国、韓国であり、もう一つは戦後処理しやすい、しかも経済進出の対象となる東南アジア諸国である。

その結果、一時は隆盛を極めたマルクス主義的な研究が、結局は単なる産業構造を論じるためのリテラシーとされ、軽視されていく。それと軌を一にして、歴史学を援用する「プレス四理論」と社会心理学に近い「開発コミュニケーション論」が、アジアのメディア環境を観測する方法として使われるようになっていく。この二つの理論の流行の背景には、アメリカの冷戦戦略により、学界や産業界などにおいて地域研究の手法が取り入れられるようになったこともあった。とりわけ、戦後のアジアに一刻も早く復帰し、アジアを援助したい日本政府や新聞界にとって、地域研究の色合いが強い「プレス四理論」と「開発コミュニケーション論」がアジアのメディア環境に介入するツールであり、いわば、自らの需要に応えた実用的なアプローチとして注目されるようになったのである。

本研究会では、占領期や冷戦期のメディア史を専門としている井川会員に討論者として、討論の端緒を開いて頂き、その後、フロアとの間での活発な質疑応答を期待したい。